

奥の細道(平泉の二節) 松尾芭蕉

諸も義臣すぐつて此の城にこもり
功名一時の叢となる
国破れて山河あり
城春にして草青みたりと

笠打ち敷きて時のうつるまで
涙を落し侍りぬ
夏草や夏草や
兵どもが夢の跡
兵どもが夢の跡

【作者】松尾芭蕉(一六四四〜一六九四)江戸中期の俳人。伊賀生。名は宗房、別号は桃青・泊船堂・芭蕉庵等。北村季吟に貞門派を学び、江戸に下って談林派の感化を受ける。のち、数度の旅を通して俳諧に高い文芸性を加えた蕉風を確立する。元禄七年(一六九四)旅先の大坂にて歿、五十一才。

【通釈】それはそうと、あの義経が、義臣をえらびぬいて、この城にたてこもり、その人たちが立てた功名や手柄も、一時のことで今は夢の如く空しい。国破れて、山河はそのままに残り城あとに、春が来ると草が青青と萌え出ている。笠を敷いて腰をおろし、ながい間、涙を落としておりました。

夏草がただ茫茫と生い茂っている。これを見ていると、その昔、栄華にふけり功名を夢みた武士たちの面影がうかんでくる。しかし、今はそのあともなくなってしまうたことだ。

(参考)吟詠教本俳句・俳文・俳諧紀行